

偕行回顧

日米若し戦わば

War in the Pacific

(昭和16年1月)

IS生 投稿記事

編集委員長：過去の『偕行』記事の中から今回は、大東亜戦争開始1年前の「日米若し戦わば」を紹介する。この時期の一つの見方として興味深い。特に、米人の見た日米戦の予測は開戦5年前に書かれたものであり、その後の経過と比較すれば、面白い。なお、分かりやすくするため現代文に編集した。また復刻版は、『偕行社創立百周年記念号』（昭和52年3月）にある。

※ ※ ※
 最近の日米関係は、いくら欲目に見ても確かに険悪な方向に進みつつあると言ふべきである。

極端な言い分かもしれないが、日米両国は既に戦争中だと思つてゐる。日米戦争が起きれば、一体、在留同胞はどうなるだろうか。

- ① 日本人の愛国心の根強いこと、
- ② 日本人が勤勉で働くこと、
- ③ 日本人の住んでいる所は海軍根拠地の付近であること、
- ④ 正義を唱えつつも過去において随分日本人を圧迫してきたこと、

等を十二分に理解しているから、米当局はこれらに在留邦人を第5列として疑いの目で見る。

在留邦人は、依然日本に帰ることなく、米国民が「正義のためには何処までも戦ひ抜く日本国民」の特質を理解するように努力する。実に国際戦争の第一線闘士としての模範を示すその精神は陰ながら感心されるものがある。

いざとなれば、第1世と言わず、第2世と言わず真の日本精神に還る、去る2千6百年の奉祝記念式典に海外同胞を代表して帰朝した代表者一同の感激は筆紙に尽くし得ないものがあつた。

これは、代表者が異口同音に申しつた偽らざる告白であつた。

したがつて、もし米国の戦争目的が正しいと仮定すれば、米国のために戦うことも大いにありうる。(中略)

※ ※ ※
 次に米国人(米海軍予備中佐)の見た日米戦を紹介する。1936年(昭和11年)の情勢を基礎としてゐるので、実際の現況とは相当のちがひがある。

●第1期
 日本軍は行動を起こして30日以内にはフィリピンを占領するだろう。

一方日本は、陸軍の大部隊を満洲、樺太、カムチャツカに出兵してソ連と戦闘を交える。暫くして日本は、グア

ム、フィリピンを占領した後、攻勢より守勢に転ずる。

これに対し米国は、第1期においては守勢的立場に立たざるを得ない。

●第2期
 国内には軍備拡張のため、いろいろな現象が起さる。

「絹なき月曜日」「コーヒーなき火曜日」「砂糖なき水曜日」などという物価統制や利潤統制も行われるが、この間、アリユーション、アラスカの基地並びに軍備の増強が行われ、駆逐艦は4カ月、巡洋艦は1カ年の速さで平時に比べると3倍くらい早く竣工する。

いづれにしても、米国の危機は攻勢準備時期にある。しかし、日本の状態も必ずしも樂觀を許さない。米国潜水艦をもつて行つ海上交通遮断、ソ連との協力による日本内地への爆撃は多大の損害を日本に与える。

●第3期
 遂にカムチャツカ半島の近海で大海戦が起こり、米国の大勝利となつて終わる。しかし、米国の大勝利となつても戦後の状況は米国にとつて必ずしも樂觀を許さないものがある。

① 米国は政治的、経済的、社会的に大きい変化を受けているから大戦前と異なつた問題が起こる。

② 戦勝後の平和会議がなかなか面倒で、東アジアにおける分割をいかに

するか。米国は、更に東アジアにおいて担う可能性が大きい。

③ ソ連との関係が困難になる。

④ 結局、ソ連と東アジアを分割する。

※ ※ ※
 この著作は空軍のことを論じていないが、米国は空軍の大部分をアラスカ、ホノルルに進めて海軍と協同するだろう。

今日の情勢から見れば、米国は北よりも南方に手を伸ばすことは火を見るより明らかである。しかしいづれにしても、おそれと武力決戦とならず、経済戦が続く。結局持久戦になる傾向が多分にある。

日米決戦が如何なる経過を辿るとも、1年や2年で終わるはずがなく、長く続くであろう。

結局、3大民族(日独伊)対アングロサクソン大民族の闘争となる。

日独伊3国同盟の締結が現存する以上、日米戦争は日独伊対英米戦争で推移するのは当然かつ自然である。友邦独伊両国は、最少の犠牲を払つて最大の効果を収め、現に収めつつ対英戦争を継続する。従つて、独伊の対英本土攻略の遅れをもつて独伊が弱いと考えるのは大いなる誤りである。またその攻略の速さを求めるのは、他力依存主義に他ならない。(後略)